

社会

全体を通して

社会は、地理・歴史・公民全分野から出題されます。3分野の配点は、公民分野の配点がやや少なめです。千葉県立高校の入試を参考にして、基礎学力を問う出題を中心に構成していますので、まずは基礎・基本事項を丁寧に学習して入試にのぞんでください。

2021 年度入試は休校期間があったため、公民分野の出題を一部に限りましたが、2022 年度は中学全分野からの出題に戻りますので、注意してください。

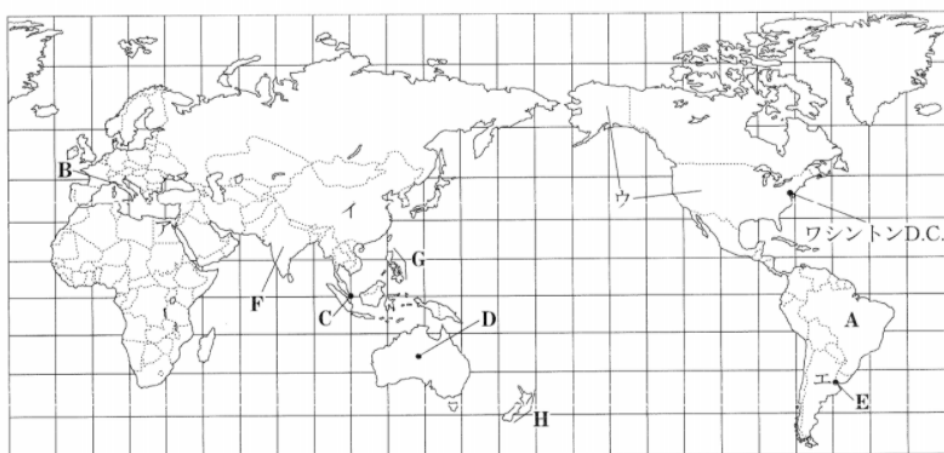
社会科の問題傾向としては、文章正誤問題が比較的多く出題されます。自分の知識＝学習成果を活かして、正解を導く作業が必要です。内容の理解に十分つとめて学習を重ねてください。

また苦手な分野があると、そこでの失点が大きくなりますので、苦手分野の対策も怠らないように心掛けて、3分野とも得点できるように準備してください。

差のついた問題について

(地理) 第1回入試大問2の(1)

2 次の図を見て、あとの(1)～(7)の問いに答えなさい。



(1) 図中のワシントン D.C. から見て地球上の正反対に位置する地点のおよその緯度と経度の組み合わせとして最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選びなさい。

- | | |
|--------------------|--------------------|
| ア 南緯 39 度 東経 77 度 | イ 南緯 51 度 東経 77 度 |
| ウ 南緯 39 度 東経 103 度 | エ 南緯 51 度 東経 103 度 |

正答率は 68% で、合格者と不合格者の差が 22% と開いた問題です。

世界地図を利用した問題には、国や都市の位置、気候などさまざまなテーマがありますが、ここでは赤道と本初子午線・日付変更線の位置を把握すること、ロンドンを境にしてどちらが東半球・西半球なのかを理解しておくことが求められます。

まずワシントン DC の位置を確認します。日本の東北地方とほぼ同緯度であることから、北緯 39 度と判断します。続いて、経度ですが、ここでロンドンを境にして西半球・東半球がそれぞれどちらであるのかを判断する必要があります。日本の標準時が明石を通る東経 135 度であることを知っていれば、ワシントンは西半球に位置することがわかります。ロンドンからワシントン、太平洋上の日付変更線からワシントン、どちらの方が経度としての数値が小さくなるか、地図上の経線でたどってみるとロンドンからの経度の方が数値が小さくなるのが読み取れます。よって西経 77 度と判断できます。

地球上のある地点とその正反対の地点（対蹠点 d）における経緯度の数値は、緯度は基準となる地点と等しい数値、経度は基準となる地点の緯度の数値と 180 度の差を求めて出た数値によって表されます。したがって緯度は南緯度。経度は東経 103 度と判断でき、エが正解となります。

緯線や経線、対蹠点といった用語をただ表面上で覚えているだけでは解答できません。地球を球体としてとらえ、語句の意味を地図上で意識しながら学習した人と、表面上で理解していただけの人との間で、正解と不正解が大きく分かれる問題です。日頃の学習より、わからない国や都市名が出てきたとき、すぐに地図帳で位置を確認すること、その際に基準となる緯線や経線を意識しながら地図と接することを学習のポイントとして心掛けてほしいと思います。

（歴史）第 1 回入試大問 4（4）

(4) C の文中の下線部 d に関連して、次のⅠ～Ⅲの文は、日本が大正時代だった期間に世界で起こったできごとについて述べたものである。Ⅰ～Ⅲの文を年代の古いものから順に並べたものを、あとのア～カのうちから一つ選びなさい。

Ⅰ ワシントン会議が開かれ、海軍の軍備を制限することなどが取り決められた。

Ⅱ 世界の平和を維持する機関として国際連盟の設立が決定した。

Ⅲ オーストリアの皇太子夫妻がセルビア人に暗殺される事件が起こった。

ア Ⅰ→Ⅱ→Ⅲ イ Ⅰ→Ⅲ→Ⅱ ウ Ⅱ→Ⅰ→Ⅲ

エ Ⅱ→Ⅲ→Ⅰ オ Ⅲ→Ⅰ→Ⅱ カ Ⅲ→Ⅱ→Ⅰ

この問題は全体の正解率 81% ながら、合格者・不合格者の差が 28% とたいへん差が開き、文字通り合否をわけた問題となります。正解率がそれなりに高いことから、この手の問題で失点することは合格から遠のいてしまうことを意味しています。

この問題が、このように差が開いた理由として、3 点あげられます。

1 点目は、時代順の並べ替えの問題だということです。過去の入試から、用語に関する問題や文章正誤問題すなわち歴史的な内容理解に関する問題に比べて、時代順の並べ替えの問題は正解率が低い傾向にあります。歴史は、それぞれの事件や政策などを理解することも大切ですが、流れの把握も重要です。流れがわからなければ本当の意味で歴史を理解したことにもなりません。内容の理解とともに、事件や社会の流れ・経緯も意識して学習してください。この問題では、Ⅲが第一次世界大戦の契機で最初ということはあるでしょうが、Ⅰ・Ⅱは第一次世界大戦後の対応です。戦後のおもな出来事は、ヴェルサイユ会議（条約）⇒国際連盟設立⇒ワシントン会議となります。このように、流れを整理しておかないと、この手の問題はみずから難しくしてしまいます。

2 つ目は、近代史の問題ということです。幕末以降の近現代の時代の問題、すなわち大問 4 で出題される範囲は、事象・背景なども複雑になり、江戸時代以前と比べると理解に時間も労力も必要とされます。また学校によっては、範囲の後半であるため学習時間が限られてくるため、授業内容が簡単になったり、省略されたりすることもあると聞いています。しかし、現在に直結する重要な時代です。また理解に時間も必要とされます。時間をかけて、しっかりと学習を重ねることが求められる時代です。

最後は、外国史の内容からの出題だからです。日本史の多くは、小学校で学習した部分の延長の学習となりますが、外国史の部分は中学校であらたに学習する部分が多く、初めて学習する部分ですので、定着に差が出ます。とくに近現代史は、一国だけではなく国際関係のなかでの理解がとくに必要とされる分野ですので、注意して学習してください。外国史が正解率に差がつく傾向としては、昨年度第 2 回の大問 4 の(2)・(6)も同様です。

この他にも、経済・産業史、文化史なども苦手な人が多い出題分野となります。

(公民) 第1回入試大問5の(3)

(3) 下線部 c に関連して、次のⅠ、Ⅱの文は、日本の議院内閣制とアメリカの大統領制について述べたものである。Ⅰ、Ⅱの文の正誤の組み合わせとして最も適切なものを、あとのア～エのうちから一つ選びなさい。

Ⅰ 日本の議院内閣制では、内閣が衆議院を解散することができるが、アメリカの大統領制では、大統領が議会を解散することはできない。

Ⅱ 日本の議院内閣制における国会議員とアメリカの大統領制における連邦議会の議員は、どちらも国民から直接選挙によって選ばれる。

ア Ⅰ：正 Ⅱ：正 イ Ⅰ：正 Ⅱ：誤 ウ Ⅰ：誤 Ⅱ：正 エ Ⅰ：誤 Ⅱ：誤

平均正答率が 38%と低い一方で、合否差 22%がついた問題です。比較的平均点の高い社会科の中で、合格者が他の受験生に差をつけた問題と言えそうです。

この問題で差がついた要因は二つ挙げられます。一つ目は問題形式です。一般的な四択形式ではなく、Ⅰ・Ⅱ両方の正誤を判別しなくてはならないため、消去法が使えずⅠ・Ⅱ両方についての正確な知識理解が求められます。本校の高校入試の問題は公立高校の入試に模しつつも、点差をつけるため、このような問題形式が少なくありませんので、学習事項全般にわたってあいまいな部分を残さず正確に理解しつくすよう心掛けてください。

二つ目の要因は、出題内容です。この問題は日本の議院内閣制とアメリカの大統領制の比較を扱っていますが、特にアメリカの大統領制については多くの教科書では欄外でのみ説明されています。基本事項にとどまらず、教科書の欄外などに書かれた発展事項まで学習を行き届かせるようにしてください。ただし、この問題については、教科書を万遍なく学習していたかどうかだけでなく、日頃の学習が実際の社会への関心に結びついていたかも、正解・不正解を分けたように思われます。昨年は四年に一度のアメリカ大統領選挙が行われていた年であり、ニュースなどをよく見ていれば、アメリカの大統領制の学習内容はよく印象に残っていたはずです。

教科書に載っているたくさんの学習事項を万遍なく正確に理解しつくすことは、それらを無味乾燥な情報として捉えているかぎりには難しことです。実際に社会で起きている出来事に結び付けて関心を持って学習することで理解を深めてほしいと思っています。